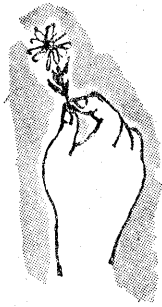


「自由遊びの指導」 をめぐるて

南 館 忠 智



1 教育実習反省会から

秋、九月から十月にかけて行われる教育実習は、筆者の勤務する大学恒例の行事です。大学で多少ルーズな生活をしてきた学生であっても、いざ子どもたちと触れ合うということ、期待と不安のいりまじった一種独特の緊張感とともに「突入」するのは、この教育実習。「教生」の経験をおもちの方ならどなたでも、ほろ苦くも懐かしく思い出されることでしょう。

さて、四週間にわたる幼稚園での実習もいよいよあしたで打ち上げ、という日の午後、実習期間全体をふりかえつての反省会がもたれました。今回は、このときのようなすを思い起こすことから始めましょう。窓の外では、逆光をあびたコスモスのシルエットが風にそよいでいるのがとても印象的な、十月上旬のある日のことでした。

最初に発言した教生は、指導案が「教生の目」からしか作れなかった、と述懐しました。その後で、教生からの押しつけが多すぎた、とか、子どもの活動を予想するのがむずかしく、空まわりすることが多かった、などの反省も出たのですが、これらは同じカテゴリに分類できそうに思います。ま

た、子どもたちに「気づかせる」より「教えこむ」結果になりがちだった、あせればあせるほど子どもにも無理じいする結果になった、などの反省もそれと深いかわりをもつ事柄のようです。

この他にもいろいろの話が出ました。教生の側の準備の不足から、せっかく盛り上がった子どもたちの意欲をそいでしまった、という自己反省的報告。ピーターパンの人形を活用した話しかけが子どもたちの注意を集中させるのに有効だった、とする自己肯定的報告。あるいは、班当番に着目した集団意識の高まりについての実践報告から、積極的な子と消極的な子の違いが大きすぎて指導にとまどった体験報告、さらには、以前にもまして音楽リズム的活動の指導に対する「恐怖症」が強まったという告白まで、じつに多種多様。

ほとんどの者が割当て時間をこえて発言せずにはいられない、ある種の熱気につつまれたこの会がようやく終わったのは、コスモスのシルエットをおおう背景全体が暗さをまし始めた、日没もそう遠くないころでした。詳細についてはそろそろ記憶が不確かになってしまったいま、あの静かな熱気とともにきわめて鮮やかに思い浮かべられることが一つあります。それは、ある教生の反省として述べられた、「自由遊び

場面における指導の重要性」です。この点が、筆者の心の中で、なぜ鮮明でありつづけるのでしょうか。

2 保育指導案から

このことに言及した教生の発言は、およそ次のようでした。クラス構成員全体が一斉に取り組む活動については、事前にあれこれ考え、また準備し、実際の指導にあたる。なかなか思いどおりに事は運ばないのだが、とにかくにも全力投球を尽す。そして、この部分がなんとか終わってしまうと、結果についての自己評価とは一応別個に、まずはホッとしてしまい、その後計画されている自由遊びの部分は「息抜き」として費されてしまう。これではいけない、いわゆる自由遊びに没頭している子どもたちに対しても保育者としてどのようにかわっていかねばならない、どのようにかわっていけばよいのだろうか、と気になりつつも結果において「息抜き」に終始してしまった——というのです。

この発言にうなずく者がいたことから、これがたった一人の反省にとどまらないことがわかりました。さらに、後で、彼女らの苦心の作である指導案の数々を改めて見直したところ、これは実践の段階で初めてあらわれるのではなく、すで

〔表1〕

時間	活動	ねらい	指導上の配慮
九：一五	<ul style="list-style-type: none"> ●登園する。 ●当番・係は仕事を 	<ul style="list-style-type: none"> ●グループの仲間を誘い、さつさと仕事を 	
九：三〇	<ul style="list-style-type: none"> ●後片づけをする 	<ul style="list-style-type: none"> ●ままとあてのう 	<ul style="list-style-type: none"> ●一人だけが頑張ってもダメ
九：四〇	<ul style="list-style-type: none"> ●ままとあてゲームの練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●ままとあてのうまくできない子を明らかに 	<ul style="list-style-type: none"> ●個人攻撃にならないように配慮する。
	<ul style="list-style-type: none"> ●話し合う 		<ul style="list-style-type: none"> ●循環指導をする。
	<ul style="list-style-type: none"> ●グループ毎に練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●グループ内で教え合うこと 	

一〇：四〇	<ul style="list-style-type: none"> ●お話（「あんばんまん」）を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●気分転換をはかることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●非協力的な発言の目だつ子には、この時点においては「教えなくてよい」とする。
一〇：五〇	<ul style="list-style-type: none"> ●自由遊びをする。 		
一一：二〇	<ul style="list-style-type: none"> ●後片づけをする。 		
一一：三〇	<ul style="list-style-type: none"> ●降園する。 		

に計画すなわち指導案作成の段階で「ネタがまかれています」ことがハッキリ見て取れるのでした。たとえば、こんな具合なのです。「表1」をご覧ください。これは、ある日の二年保育年長組の指導案です。

蛇足をつけ加えるなら、九時四〇分からの「まとあてゲームの練習をする」活動については、「ねらい」欄、「指導上の配慮」欄ともキチンと記載されており、その上、ここでは割愛しますが、三ページにもおおよぶ細案まで用意されています。これに対して、一〇時五〇分からの「自由遊びをする」はどうでしょう。細案などなく、ご覧いただくとおり、じつにスッキリ(?)したものです。

3 自由遊びと保育者の指導性

教生たちは貴重な経験を積んで、しかも未解決の問題をたくさんかかえて、大学に戻ってきました。かなり未消化の問題意識と、そしてまたかなりの疲労とともに大学キャンパスに帰ってきた彼女らを待ちかまえているのが、卒業論文を仕上げる仕事です。ここ二ヵ月ちかく遠ざかっていた、懐かしくも手ごわい「強敵」と再び取り組まねばなりません。しめ切り日が数ヵ月先にせまっているのです。当事者としての「教生」時代の経験を、それを客観視できるはずの「学生」という立場から、反すうし咀嚼しなおすゆとりをもてないわけで、残念に思います。

こんな次第で、「自由遊び場面における指導の重要性」に

ついても、討論を深め合う機会をつくれぬまま、きょうに至りました。これから以下は筆者の個人的見解になります。

自由遊び場面における指導の重要性。正直なところ、このテーマにかかり得る問題点は少なく、また多岐にわたっていて、とても快刀乱麻を断つような離れ業はできそうにありません。そのむずかしさは、たとえばこうです。

このテーマを耳にした方々から、いったい、自由遊びとは何か、どのようなものとして把握しているのか、という質問が出るのはほぼ間違いないところです。そして、十分に納得していただくためには、「自由遊び」の概念規定をしただけではダメで、子どもたちの活動をとらえるカテゴリ全体をキチンと示すことが不可欠となるでしょう。

この点、納得がいった、となるとすぐ次に、では、それら(複数個)の活動カテゴリを、どのような原則にそって、どのような手順で有機的に体系づけていくのか、と来ることうけ合いです。関連質問として、その際の原則や手順は普遍性をもったものかどうか、もしそうでないとしたら、どんな条件のもとでどのようなバリエーションを考えればよいのか、その根拠は何か、と問われるかもしれません。

また、指導という側面からの質問も殺到するでしょう、幼

稚園の場で「指導」などはけしからん、とする詰問タイプから、指導おおいに結構、さてどんな特質をもった指導？という純粋な質問まで、その「振幅」は大きいはず。その上、どのような発想法からこれらの質問が発せられるのか、その関連性をも合わせ考えると、両者のからみ合いはじつに複雑。

以上かいま見た幾種類かの問題点は、多岐にわたると言うよりも、深いところで同じ根っこにつながる相互に関連したもの、と見なすのが妥当かもしれません。となると、その根っこエックスを探し当てる「かぎ」を入手できずにいる現在の筆者にとって、残された手は、「お手上げ」ということになってしまいます。

4 自由遊びと指導は矛盾するか

手詰まり状態から抜け出すために、窮余の一策を採用することになります。これまでゴタゴタ述べてきた部分(3)をここで一応「破算」にさせていただきます。その上で、白紙の上に、子どもたちの展開する「自由遊び」と、保育者の行う「指導」とを並べます。次に、可能なかぎり懐疑心を抑えてください。さて、気楽に連想ゲームです。「自由遊び」

と「指導」。

いかがですか。どうも連想がわからない、違和感が先に立つ、と首をひねっている向きが少なくないようです。中には、ズバリ「矛盾」を連想された方もおいでは。「その方、いただき」と言うのは、いささかペテンにかけたようで恐縮なのですが、ここに、以下の考察の出発点をおきたいと思えます。すなわち自由遊びと保育者の指導とは矛盾することなのかどうか。

筆者の見解はこうです。それを矛盾するものとは考えない。もつと有り体に言えば、矛盾するものと考えたくない、となります。そんなこと当り前ではないか、と一笑に付される方、ちょっとお待ちください。こちらからお尋ねいたします。なぜ当り前と結論つけられるのでしょうか、その理由をお聞かせください。時として、結論よりもその過程のほうがより重要なことを、筆者は知っています。(この点、第一回を参照ください。)結論が出ているからそれでいいではないか、という論法にはどうもなじめないのです。

2で引用した指導案における自由遊びの扱いと、1で述べた自由遊び場面での指導の重要性の指摘に、改めて注目してみましよう。反省会で発言した者と指導案を作った者とは別

人ですので、論の進め方がいささか強引のそしりをまぬがれ得ないのですが、ここで両者が同一人だったと仮定してみます。この仮定が評されると、自由遊びを展開している子どもたちへの保育者のかかわり方について、理念と実践との間に大きなギャップが存在することになります。筆者が強引を承知のうえで「継ぎ合わせ」を試みたのは、これと同類の保育者が現実にならず見受けられるからに他なりません。

このギャップはどうすればよいのでしょうか。一斉活動の場面なら指導案を一つ用意すれば事足りるけど、自由遊びとなったらそうはいかない、子どもの数だけ指導案を作るなんて不可能だ、だから——という理屈づけは「良心的」なのでしょう。そしてまた、不可能だからこそ忘れることのないよう、機会あるごとにハッキリ意識しなおすことこそ、現実的にして最善の方法だ——という論法ははたして最善のものと言えるでしょうか。このように考えると、理由をキチンと述べることなしに「当り前」と済ましてしまうやり方が、ますますインチキなものに思えてきてしまうのです。

5 なぜ両者は矛盾ではないのか

威勢のいいことを言ってしまったてまえ、自由遊びと保育

者の指導を矛盾しないと考える(考えたい)筆者自身の理由づけをしなければなりません。自分なりに十分納得できるまで練っていないのですが、「予感」をまじえつつ述べてみましょう。

まず第一は、やや消極的だがオーソドックスな理由です。自由遊びといえども、幼稚園という意図的・人工的な場において、しかも保育者の計画のもとになされるからには、原則的には他の活動と同列の手順をふんで発想され位置づけられて当然のはず。「ねらい」欄がブランク、「指導上の配慮」欄もブランクというのは、したがって、理解に苦しむところ。ねらいも配慮もない、保育者不在の「真空地帯」を、園の生活の中に積極的・意図的に設けるべきだ、というご意見をおもちの方がおいでなら、一度ご教示をお願いしたいと思います。

先生と一緒の活動が長く続いてはかわいそうだ、その後には必ず緊張解決のための「真空地帯」を保証してやらなくては、とおっしゃる方。どこかで大変な思い違いをされてはいませんか。たとえば、一斉活動を「勉強」に見立て、自由遊びを「遊び」に見立てるような。あるいは、保育者と一緒だと「真剣」だから「疲労」し、子どもどうしだと「不まじ

め」だから「気休め」になる、などと。もしそうだとしたら、緊急に考えなおしが必要だ、と思います。事はすでに自由遊びという範囲をこえて、保育全体にかかわる大問題にまで発展してしまっている、と思えてならないからです。

第二点を急ぎます。より積極的・意欲的な理由と言いたいところですが、まだ海のものとも山のものともわからない、と言うべきでしょう。説得的な説明などでできそうにない現状なのですが、この自由遊びと指導をめぐる考察を深めていけば、子どもの「興味」の位置づけにかかわる諸問題に新しい局面が開けるのではないか、そんな感じがするのです。こんな見極めのついていない事柄にあえて触れるのは、「興味」に大きく寄りかかった保育理論ないし保育実践にどこか違和感を感じずにはいられない筆者の「へそ曲がり」のなせる業です。

前回、「発達段階に応じた指導」にひそむ弱点、ないしレディネス探知的アプローチのはらむ危険について私見を述べました。その根源はひと口で言えば「変容メカニズム解明という視点の欠如」にある、とも述べました。これと同じ体質を「興味」という概念の中にも感じるのです。このことばは、「興味をもっている」と使われる際の滑らかさに対して、「興

味をもつようになる」という場合、どことなく滑りが悪くなります。前回の用語で言えば、どうも「形成的」なニュアンスの薄さはいなめないようです。

それで、このことばに代えて、たとえば「必要感」とか「要求」とか、まだ成案はないのですが、そのような捉え方のほうが生産的ではなからうか——などと考えている筆者にとって、「自由遊びおよびそれへの指導」は新しい魅力をもつめたテーマに見えてきてしまうのです。園の門をくぐったとたん、実生活の場とはあまりにかけ離れた「人工的」場が（いい意味でも悪い意味でも）待っている現実を思うとき、その魅力は一段と大きく感じられます。最終的な結論を引き出すまでに、ジックリと暖めてみようと思います。

(三重大学)